

次の文章を読んで、後の課題に答えなさい。

人間は、ヨーロッパ世界がその歴史によつて明らかにしてきたような、デカルト的な二元論的分裂のなかだけで生きていくのであろうか。つまり、「自然」の言葉は、明証的な「数学」であり、そこに加えられるのは、「物質」と「運動」だけである一方で、「人間の言葉」は最終的には「第一人称単数現在」のみに集約されてしまうような「このころ」の言葉であつて、それは多義的かつ象徴的な、そして客観的な共有性を持たない限界を持つ、という理解だけで、人間は生きていくのであろうか。

例えば「自然」に戻つてみよう。われわれは、ともすれば「自然」を、望遠鏡で見る天空、顕微鏡で見るミクロな世界、あるいは泡箱（素粒子の振舞いを間接的に見ることができるよう工夫した装置）で撮影された写真の世界と結び付ける社会に生きている。それは「物質」と「運動」と「数学」の世界である。それは繰り返すが、法則に冷厳かつ忠実に従う自然であり、明証的とされる自然でもある。

しかし、人間が自然と対峙したとき、あるいは人間が自然のなかに立ったとき、人間に聞こえてくる自然の声、人間の目にする自然の姿が、「物質」と「運動」と「数学」から成り立っていないことも明らかである。ちようど「物質」と「運動」と「数学」の世界を読むためには、それなりの基礎教養（リテラシー）が必要であるのと同じように、そうではない自然の声、自然の姿を読み取るにも、それなりの基礎教養が必要であるのに、現代のわれわれは、そのような基礎教養の準備や訓練を全く不必要なものとして顧みなかった結果、それが読み取れないだけではないのか。そうした自然の語る（「人間の言葉」ではない）言葉を、われわれが読み取れないだけである、とするならば、ガリレオがいみじくも言った「様々な矛盾だけでなく、けしからぬ異端や瀆神まである」と心配するような聖書の文言の意味も違つてくるかもしれない。現在では（ガリレオにおいてもある程度はそうであつた）、それらは、よくて比喩や暗喩、あるいは凡俗な大衆を納得させる修辞、悪ければ、単なる「非科学的」で原始的な社会のなかで積み重ねられるたわごとにし映らない。しかし、このような神話的な描写や記述も、ほとんど字義通りに解釈してよいものにさえなり得るのである。

そのころの人々が、泡箱や顕微鏡の示す世界に風馬牛であるのは、彼らが、そうしたもののから何かを読み取るリテラシーを欠いているからである。われわれが、そうした神話的な描写や記述の世界を理解不能として無視するのも、同じようにわれわれが、そうした世界を読み取るリテラシーを欠いているからかもしれない。

言い換えれば、神話時代の人々は、「人間の言葉」だけでなく、また「数学」という「自然の言葉」だけでなく、自然、山や川、草や木が語る人間以外の言葉を理解する能力を、今のわれわれよりもはるかに豊富にかつ鋭敏に備えていたとも言えるのである。

この点は、一七世紀以降のヨーロッパが辿つた歴史過程のなかで、すでに指摘した「自然の言葉」と「人間の言葉」の分類が、狭すぎることを示唆する。自然は、そうした「自然」よりもはるかに豊かで、はるかに多様なメッセージを、われわれに伝えようとしている。その

中には、「数学」にはならない神の言葉も在るのかもしれない。われわれは、たまたま今それを聞く耳を持たない。

そうだとすれば、神の声を聞くという「奇跡」もまた、われわれの通常的能力の外にあるだけのことなのかもしれないか。

われわれの感覺的能力にかなりな個人差や種族差があることは、よく知られている。通常可聴領域の音スペクトルからずれたところに「音」を聞くことのできる人がいる。砂漠で暮らすベドウインの人たちは、普通の視力なら黒い点にしか見えないところに、駱駝二頭、人間四人などと見分けることができる。オーストラリアの原住民のなかには、イヌに匹敵する鋭い嗅覚を備えた人々がいる。そうした能力も、大都会で暮らす間に、たちまち鈍麻されてしまうという。通常の五感でさえそうである。

自然が語る「言葉」を聞き、読み取る能力、神の声を聞き、読み取る能力、もちろんこれら二つは必ずしも並行に論じることができない性格のものであるが、しかし、もしかしたら、同じような構造を持つているのかもしれない。

いずれにしても、少なくともわれわれが、自分たちの平均的・標準的な能力を基準にして、過去の、あるいは知られていない別の文化のなかで、人間が発揮している(らしい)能力を、不可能であるとか、非科学的で信用できないなどという判断の下に、無視してしまう権利はない、という主張には、耳を傾ける必要があると思う。

こうした文脈で改めて「奇跡」を考えてみよう。「奇跡」の成立要件のなかで最も基礎的なものは、人間を超越した存在を認めるところにある。そして、そうした超越から自然(人間も含めた)への直接的な働きかけの存在を認めることである。

一九世紀以降の「科学」は、すでに見たように、自然(人間を含めた)に関して、それを越える何ものかを認めることを拒否する。むしろ、その拒否を自らの特性として規定したがって、その自己規定にしたがって、論理的に「奇跡」を自らの内部で論じる余地を失った。その点では、すでにガリレオもまた、同じ論理の上に立っている。ガリレオは言ったではないか。自然は、神から与えられた掟に冷厳に忠実であり、そこから逸脱はしない、と。「数学」で掴むことのできる自然は、その限りでの自然である。そこから逸脱する自然がもしあるとしても、それは、その定義のなかでの自然ではないだけである。それは「数学」で扱わないし、扱えない。

それゆえ間違っではいけないのは、科学が自然を越えるものを認めることを拒否したのは、言うまでもなく、「科学」の自己規定に関してである、という点である。言い換えれば、自己の扱う範囲のなかに、自然を超越した何かを組み入れることを拒否したのである。そうすることによって、科学は科学であることができる、と宣言したのである。したがって、科学がもし「奇跡」を科学的根拠にしたがって「否定」するとすれば、それは、自分自身が設定した権域を、自ら犯し、権域の外に踏み込んでいる、という自己矛盾に陥ると言わなければならない。

仮に「奇跡」と呼ばれるものを認めるとすれば、それは、人間が常識と日常に慣れ、そのなかでそれぞれの時代と共同体のなかで使われる「人間の言葉」(と「自然の言葉」)の範

困でのみ生きている状態が、一瞬に破れることであろう。その破れは、人間を越えた「超越」からの直接のメッセージである。

誰もが、こうした文脈で引用する文章にアレクシー・カレルのものがある(『ルルドへの旅・祈り』)。カレルは一九一二年にノーベル生理学医学賞を受賞した科学者である。ちなみに彼は一八九五年兵役の途中、フレジュスの山中にあつて、上に述べたような意味での自然の声(もしくは神の声)を聞くという体験をしたという。その彼が一九〇二年に「奇跡」に出会つた。瀕死の少女がいた。医師であるカレル自身の診断は、結核性の腹膜炎で、すでに重症であり、あと数日保つかどうか、というものだった。その少女が列車に揺られてルルドへ赴く。付き添つた形のカレルがルルドで目撃したものは、その少女が快癒していく過程だった。彼は、科学者としてその目撃談を、ある意味では淡々と上の書物のなかで語っている。

無論カレルにとつて、この体験は衝撃であつた。しかし、それは彼個人の問題である。このときのカレルは、これを「奇跡」とは認めていない。当然ながら彼は、超越者の存在を確信していたわけではないからである。その確信を得たとき、それはカレルにとつて「奇跡」となつたはずである。

この論考を始めた際、「奇跡」は「不思議」であり「驚き」である、という規定をした。確かに、このルルドの例は、カレルにとつて大きな「驚き」であり「不思議」であつた。それを読むわれわれにとつても、「驚き」である。われわれの日常の安定のヴェールが引きはがされ、共同体の与えてくれる「人間の言葉」と「自然の言葉」(現在のわれわれなら「科学の言葉」)でルーティンに説明し納得することのできないような出来事、自分自身の言葉と信念で考えなければならぬような事態を突き付けられたからである。

もし「奇跡」に効用があるとすれば、恐らくそういう効果なのだろう。それは文字通り「破れ」であり、それを通じてわれわれは、そのメッセージを放つたものの存在を思うかもしれないからである(カレルの場合はまさしくそうだった)。日常の「人間の言語」を百万言葉費やして記述し、描写したとしても、それが「人間の言語」であるという限界から、伝えることのできない「超越者」のメッセージを、われわれ人間は一瞬に、あるいは徐々に感得することもかもしれない。言うまでもなく、それは飽くまで「かもしれない」である。

その意味では、われわれは、「不思議」に出会うことは可能である。皮膚科の医師ならば、皮膚の上に数多く散らばつていたある種の疣(いぼ)が、それも薬の投与や塗布によってではなく、一言の暗示的な言葉によつて、一夜にして消失するのを目撃することがあるかもしれない。もちろん、それは、「奇跡」として理解されることは少ない。今の「科学」の説明の範囲には、適切な形で組み込まれない現象は、この世界にいくつもあるからである。

しかし、宇宙に飛び出したアメリカの宇宙飛行士のなかに、そういう種類の「不思議」や「驚き」には出会わなかつたのに、そこでの「自然の声」に出会つて、超越的存在からのメッセージを受け取つたと感じた人がいたことを、われわれは思い出す。

したがつて、われわれにとつて、真に「奇跡」と思われることは、「奇跡」的な出来事に出会うことではない。むしろそれは、本当の「驚き」を導くための小さな手掛かりに過ぎないのかもしれない。

というのも、すでに繰り返して述べてきたように、超越者の存在は、それがあつたとしても、超越者であるというそれだけの事実から、われわれ人間に知られ、理解されることが、ほとんど論理的に困難だからである。超越者を語るためのわれわれの言葉は、ほとんどが「人間の言葉」ではない。超越者からの言葉のメッセージは、これもあつたとしても人間が理解するためには、「人間の言葉」で語られなければならない。つまり「言葉」で人間に伝えられ語られる内容は、一向に「超越的」ではなく、「人間的」、あまりに「人間的」である。そうしたトートロジカルな限界を越えて、超越者ではない人間が、ある場合に、超越を知り、超越を理解し、超越を信じる（それが人間の限界の内部での話であつたとしても）ことがあり得る、ということこそ、真に「奇跡」というべきことなのではあるまいか。誰もそうは感じていないが、われわれが超越者を「人間の言葉」で論じることができる、ということ自体が、これまでの分析に照らしてみれば、「奇跡」の名に値するのである。

（村上陽一郎『奇跡を考える――科学と宗教』より。一部変更）

課題

- （一）右の文章で「奇跡」はどのようなことと考えられているか、八〇〇字以内でまとめなさい。
- （二）文学部で学ぶということについて、右の文章を踏まえながら、あなた自身の考えを一〇〇〇字程度で述べなさい。